



## 👁️👁️ みどころ

台湾の名優張震(チャン・チェン)とのコラボに続いて、キム・ギドク監督15作目では日本のオダギリジョーとのコラボが実現!夢で見たことが現実にも、しかもそれが女性の行動として。そんなバカな……。ふたりはひとり。白と黒は同じ色。さて、そのココロは……。?別れた女を今なお愛する男が見る夢とは?他方、別れた男を憎む女がとる行動とは?タイトルに込められた意味をしっかりと理解しながら、絶対にしゃべってはいけない、味わい深いクライマックスをしっかりと味わいたい。

### 14作目は張震、15作目はオダギリジョー

私の大好きな韓国の鬼才キム・ギドク監督の14作目『ブレス』(07年)は、四季をテーマとし、台湾の俳優張震(チャン・チェン)を死刑囚役として起用した感動作だった。しかしてそこでは、韓国語をしゃべれないチャン・チェンを、どんな役柄に設定(?)してそのハンディキャップを乗り越えるのが1つの興味的だった。

すでにそんな経験を持つキム・ギドク監督は、15作目に、『ゆるる』(06年)などの名演で今や日本を代表する若手俳優となったオダギリジョーにオファー。彼がそれに応えたことは言うまでもない。しかし、オダギリジョーは英語はしゃべれても韓国語はダメ。『モンゴル』(07年)で浅野忠信が猛特訓を受けて全編モンゴル語で見事に主役を張ったのと同じように、オダギリジョーも特訓で韓国語をマスター?

いやそれでは「早く!安く!」がモットー(?)のキム・ギドク監督の製作主義に反してしまう。その結果、何とオダギリジョー演ずるジンは、日本語のまま韓国の俳優陣たち

の韓国語に混じり合うことに。しかし、それはちょっとヘン。私を含めて誰もが一瞬そう思うはずだが・・・。



(C)2008 KIM KI DUK FILM All Rights Reserved

## タイトルに注目！

キム・ギドク監督の作品のタイトルは、『鱒』(96年)、『悪い男』(01年)、『うつせみ』(04年)、『サマリア』(04年)、『弓』(05年)、『プレス』(07年)など単語1つのシンプルなものが多い。そしてその15作品目も『悲夢』とシンプル。『悲夢』とはつまり「悲しい夢」なるほどそうだが、そう簡単に納得できるレベルの「悲しい夢」とは思えない。

近時、とりわけ大阪府下で悪質な車のひき逃げ事件が多発しているが、映画の冒頭ジンが犯すのもそれ。いくら別れた恋人の車を追っているからといって、被害を受けた車の運転手が重傷を負っているのに、それを放置するとは何ゴト！さらに恋人の車を追っかけていく途中、今度は路上に飛び出してきた男を危うくひき殺しそうに。そこで、ハッと目が覚めたら、自分の部屋のベッドの上。だったからよかったものの、これが夢でなく、現実だったら・・・。

## ヒロインは誰が？

愛をテーマとした映画を作り続けているキム・ギドク監督作品には、必ず美しいヒロインが登場する。この映画のそれは、イ・ナヨン演じるラン。あまりにもリアルな交通事故の夢をみたジンが、気になって現場へかけつけてみると、そこにはすでに警察官が来て被害者を収容していたが、なぜかすでに犯人はつきとめられた様子。そこでジンが厚かましくもパトカーの後ろをついていくと、そこには壊れた車が駐車しており、その車の所有者ランが今まさに連行されるところ。

さあ、ここでもジンはそれを見て見ぬふりをしてしまうの？ そんな役はオダギリジョーにはふさわしくない。「彼ならきっと・・・」誰もがそう予想するとおり、ジンは潔くひき逃げ犯は彼女ではなく自分だと自首したが、なんせ彼の言ってることは夢の中でみたことだから、警察官から「夢と現実を一緒にするな！」と怒鳴られたのは仕方なし。

ここで明らかになるのが、ランには夢遊病の気があり、ある女医さん（チャン・ミヒ）の診察を受けていたということ。すると、ジンがみた夢のとおりランが行動を起こしていたということ？ そんなバカな・・・？ 当初警察官に激しく抗議しておきながら、少しずつコトの実態がみえはじめると急に泣きだしたヒロインのランを『私たちの幸せな時間』（06年）ですばらしい演技をみせたイ・ナヨン（『シネマルーム13』99頁参照）が熱演している。さて、こんなわかったようなわからない物語は、以降どんな展開を？

## 暗示的な言葉が女医の口から

1週間ほど前からジンを夢遊病患者として診察していた女医が、ジンとランを並べて診察してみると、いろいろ興味深いことがわかったようだ。ジンが別れた女を今なお愛しており思い切れないのと同じに、ランは別れた男が憎くてたまらないらしい。このように、表れ方こそ180度異なるものの、2人の病いの根は同じだというのが女医の診察で。

つまり、「ふたりはひとり」であり、「白と黒は同じ色」だということ。なるほど、そう言われれば、わかったような気がするが、その深い意味は？ それを突きつめていくのがキム・ギドク流。そしてそれを感じとるのがキム・ギドクのファン。

## 眠りの欲望を押えることは？

『バットマン ビギンズ』（06年）とそれに続く『ダークナイト』（08年）でバットマン役を演じているのが筋骨たくましいクリスチャン・ベイルだが、彼が現実に体重を30kgも落として挑んだのが『マニスト』（04年）の主人公トレバー。なぜなら、この映画は365日眠っていない男が主人公だから。私はその評論で、主人公トレバーがみる夢を少し論じたが、そんな「夢いろいろ」の中、夢と現実の境目は・・・？（『シネマルーム7』382頁参照）。ちなみに『インソムニア』（02年）も不眠症をテーマとした作品

だったが、腕利き刑事のそれは6日間だけだから、365日に比べると問題外・・・。

ジンが夢をみるのは、別れた女が今なお大好きでその未練を断ちきれないため。したがって「夢をみるな!」というのは土台ムリな要求。ジンが夢をみないようにするには眠らないことが1番だが、誰にでも『マシニスト』のトレパーのようなことができないのは当然。そこでジンとランの話し合いの結果合意したのは、「互いに眠らないように監視しよう」ということだった。しかし、そんなことがホントに可能・・・?

## なぜパク・チアとキム・テヒョンが?

この映画は中盤、睡魔に襲われてもそれに打ち勝つべく、自らの肉体にキズをつけながら頑張るジンの姿が登場する。これは、つい油断をしてジンが眠ってしまい夢をみると、ランがその夢と同じような行動をとる失敗を何度かくり返したため。ジンの夢に出てくるのは当然今なお愛する別れた女だが、不思議なのがそれに絡むもう1人の男。これはひょっとして、ランが別れた今なお憎んでいる男・・・?

そんな映画のストーリー構成のため、スクリーン上にはもう1人の女を演ずるパク・チアともう1人の男を演ずるキム・テヒョンが登場する。キム・テヒョンはキム・ギドク作品初出演だが、パク・チアは『プレス』(07年)でヒロイン役を演じたうえ、『コースト・ガード』(05年)、『春夏秋冬そして春』(04年)にも出演しているから、キム・ギドク作品は4作目。そんな重量級女優(?)を起用するにはそれなりの理由があるはず。そう思って観ていると、なるほど、なるほど・・・。

## ある小道具に注目!

こんな不思議な夢物語(?)にふさわしく、キム・ギドク監督は2人の職業もオースドックスなものではなく、かなり職人的なこだわりをもつ職業に設定しているので、それにも注目!

ひき逃げ交通事故が縁で知り合うことになった2人が当初互いに好感をもっていなかったのは当然。したがって、「一緒に過ごしながらいかに眠らないようにしよう」というジンの提案が一瞬ランに誤解されかかったのも仕方ないところ。

そんなさまざまなりとりを経て、今や2人は互いの家を行き来しながら一緒に眠る(眠らないようにする)仲になったのだが、そんな流れの中で注目すべきは、ある小道具。それは、ランがジンの部屋を訪れた際に偶然みつけた蝶の形をしたネックレス。ランが気に入ったことがわかったジンは、気前よくそれをランにプレゼントしたのだが、この蝶の形のネックレスという小道具がその後のストーリー展開に大きく効いてくることになるから、それに注目!

ちなみに、1本平均約90分という短い上映時間がキム・ギドク作品の1つの特徴だが、そこには過激なセックスシーンもよく登場する。そして、この映画にもそんなシーンが2

力所あるから乞ご期待！しかして、そのうちの1つでは、このネックレスが強烈に何かを暗示・・・。

## はじめて星4つとしたのは？

私がこれまで観たキム・ギドク監督作品はすべて星5つの最高点だったが、今回は迷いながら星4つとした。それはなぜ？

キム・ギドク作品を嫌う人は、その理由として「悪い男」を典型とする暴力シーン（特に女性に対する）の過激性をあげるようだが、私はそれについての抵抗性、嫌悪感は全くない。またキム・ギドク作品は抽象的でわかりにくいという批判に対しては、それは「あなたのセンスの問題、感性の問題」と反論したい。

しかし、この映画で私が少し気味悪く、思わず薄目にしてしまったのは、ラスト近くに見る、眠りを極限まで我慢するためのジンの自傷行為の様子。前半のそれは、針で指を刺したり頭を刺す程度だったが、眠ってしまうたびに事態がひどくなっていく失敗にいらだったジンは、ある時「これからは絶対に眠りません！」と宣言。それは、別れた恋人の情事を目撃したジンが嫉妬に狂いその邪魔に入った夢をみた結果、ランが逮捕され精神病院に収容されるという大変な事態になったためだ。

ラスト近くになってのジンの睡眠防止策は、顔をキリで刺したり、かなづちで足の甲を打ちつけたりとまるで拷問。こういう血を流すシーンが意外に苦手な私は、これが続くとホントにスクリーンを正視することが困難に・・・。作品全体の出来としては当然星5つのこの映画を星4つとしたのは、このように私の怖がりの問題だけ。そして、私の星の数はあくまで私の独断と偏見にもとづくものであることは最初からお断りしているから、念のため・・・。

## 絶対に、しゃべってはダメ！

とことん自傷行為をくり返ししながら眠らない努力を続けているジンの最終到達点は、「死んだら夢もみなくなる」ということ。そんな極限状態の中で精神病院の面会室に入り、やっとランと会うことができたジンはそんな決意を伝えたが、そこで、今はやさしく天使のような顔になっているランがみせた反応とは？それが、このシーン以降展開される絶対にしゃべってはダメな、短いストーリーの出発点。

さあ、この映画でキム・ギドク監督は、ジンとランのどんな愛の姿をスクリーン上に表現するのだろうか？それは言うまでもなく、あなた自身がこの映画をみてのお楽しみ・・・。

2008（平成20）年12月3日記